



～ 子どもの素敵などころに目を向け伸ばす ～

石垣市教育委員会 学校教育課長 前三盛 敦

世界的ピアニスト辻井伸行さんを知っていますか。2009年ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝し、世界を感動の渦に巻き込み一躍有名になりました。しかし、伸行さんは「小眼球症」という生まれつき目が見えない病気で、全盲の伸行さんの活躍の陰には、母親いつ子さんの存在がかかせませんでした。

伸行さんが生まれてすぐ、目が見えないことを知ったいつ子さんのショックは相当なもので、「ああ、この子は一生、青い空や美しい草花を眺めることができないのだな」と泣いてばかりいました。

そんな時、全盲で盲導犬を連れてアクティブな人生を満喫する福澤美和さんの本に出会い、薫にもすがらる思いで、福澤さんの住む箱根まで会いに行きます。子育てに悩んだいつ子さんを救ったのは、「普通に育てたらいい」という福澤さんからの言葉でした。それからは、他人と比較することをやめ、「この子はこの子のペース、他の人より早くても遅くても、どうということはない」と考えるようになったそうです。

伸行さんが生まれて8ヶ月が経ったころのことです。伸行さんは、ショパンの「英雄ポロネーズ」の曲が流れると手足をバタバタさせて喜ぶのですが、そのCDが傷ついてしまった際に、別の「英雄ポロネーズ」のCDを流したところ全く反応を示さなかったようです。「この子には音楽の才能があるかもしれない！」その時、いつ子さんは、同じ曲であっても演奏家が異なると、伸行さんの反応が違うことに気づきました。

いつ子さんは著『今日の風、何色？』で、『今思えば、このときの「私の気づき」がその後、伸行が才能を開花させるうえで、大きなポイントになったと思います。』と、親が「子どものよさ」に気づく大切さについて述べています。

その後、伸行さんは、多くの理解のある指導者に会いピアノを学んでいきます。また、辻井家では、キャンプやスキー、花見や花火に出かけては、大自然の中で様々な感覚を育てることを重視しました。「風が気持ちいいね」「水の音がきれいだね」「木の葉のささやきが素敵に聞こえるね」等、言葉でその情景、そして色を伝えました。さらに、親子でよく美術館に出かけ、いつ子さんが展示されている絵の説明をしていたそうです。伸行さんが、数々の試練を乗り越えプロのピアニストの階段をのぼっていく過程には、いつ子さんの伸行さんへの様々なかかわりがあったのです。

いつ子さんは、ホームページの「辻井いつ子の子育て広場」を通して、「私はどんな子にも才能があると信じています。そして、それを最大限引き出してあげるのが親の役目だと思います。」とアドバイスしています。また、子育ての大切なポイントとして、「子どもは、周囲と比較するから些細なことで一喜一憂するし、萎縮してしまう。人と絶対に比較せず、その子の本分を見つけて思いっきり伸ばしてあげることが大切だ。」と伝えています。

確かに、人は誰でもできないところがたくさんあり、子どもはなおさらです。いつ子さんは、伸行さんのできないことをできるようにしようとするのではなく、伸行さんの一番優れているところ、素敵など

ころ、得意なところに目を向け、励まし勇気づけていったのです。

これこそ、子育てにおいて最も大切なことではないでしょうか。あなたのお子さんの素敵どころはどこですか。「やってみたい」と言っているものは何ですか。喜んで取り組むものは何ですか。いつ子さんのように、お子さんの可能性を信じて勇気づけていきたいですね。